

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25370039

研究課題名（和文）「共生の倫理学」の基礎構築をめざした多文化性と多文化共生に関する現象学的研究

研究課題名（英文）Phenomenological study on the multiculturalism and the multicultural symbiosis : with the aim of making the foundation of the "ethics of symbiosis"

研究代表者

川瀬 雅也（KAWASE, Masaya）

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：30390537

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、共同体に関する人文社会学（歴史学、社会学、政治学等）の成果を検証することで、古来、人間が、原系列との同時的意識や、土地や共同体への没入の意識によって自己の存在を支えられてきたことを解明した。また、こうした解明の成果を、生の現象学や現象学的精神病理学の成果に接続させることで、諸個人の生の根底に、原系列としての「生」との結びつき、および、共同体や大地との結びつきがあることを哲学的に解明した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we have elucidated, by examining the outcome of humanities and social sciences (history, sociology, political science etc.) on communities, that the existence of human beings have been supported since ancient times by the consciousness of their simultaneity with the origin and the consciousness of their absorption into the land and the community. By connecting the results of this elucidation to the results of phenomenology of life and phenomenological psychopathology, we clarified that there are connections with the original Life, the community and the earth in the foundation of the life of individuals.

研究分野：哲学

キーワード：現象学 多文化 共生 共同体 文化 生の現象学 共生の倫理学 ミシェル・アンリ

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の現象学の流れのなかでは、「自然」概念が人間的経験の根源に見いだされると同時に、そうした流れのなかで、「文化」が「自然」からの派生物として解釈されてきた。しかし、ミシェル・アンリ(Michel Henry, 1922-2002)の研究を通して、彼の「生の現象学」のうちにこそ「文化」概念を根本的に再考する道が開かれうることを確認するに至った。(雑誌論文、参照)

(2) 他方、昨今のグローバル化の流れの中で、多文化社会や多文化共生という問題が現代社会の最重要課題の一つになっているが、こうした問題はこれまで、政治学、経済学、社会学などといった学問分野の課題とされ、哲学においては、ましてや現象学においては、研究テーマにされることはなかった。

(3) しかし、「文化」を現象学的な考察のテーマとし、多文化性や多文化共生という事態を生きる個人の生に立脚して多文化社会のあり方を再考するならば、多文化社会が抱える問題にいわば内面的な光をあてることができ、政治学・経済学・社会学などは異なった視点から、この問題にアプローチする可能性が開かれることに気づいた。

(4) また、このように個人の生に立脚した文化の現象学的考察から、文化を生きることの人間の意味を解明できるならば、そこから、人間の根源的な生のあり方に照らして、多文化社会における生を再考する道が開け、そうした考察に基づいて、「共生の倫理学」を構築するための道筋を見いだせるという見通しを得た。

2. 研究の目的

(1) 従来の存在論の原理を根本的に刷新する意図を持つミシェル・アンリの「生の現象学」に基づいて、「文化の現象学」の構築をめざす。

(2) グローバル化の流れの中で、多文化社会や多文化共生という問題が現代社会の最重要課題の一つになっているが、こうした現象を、多文化を生きる主体の生に立脚して、「生の現象学」の観点から探究することで、多文化や多文化共生という現代的課題に対する哲学的な地盤を提供する。

(3) 「生の現象学」に基づいて、多文化共生の哲学的可能性を探究することを通して、相互の「差異」の承認と高次の価値の「共有」を可能にする「共生の倫理学」の基礎を構築し、多文化社会における共生を支える倫理的原理の探究に道を拓く。

3. 研究の方法

本研究の申請時には、研究の方法は以下のように構想していた。

(1) アンリの「生の現象学」において「文化」が一般的にいかに規定されているかを明確にする。

(2) 「生の現象学」に基づいて、主体的個

体の実在的な存在様態に根ざした「文化の現象学」を構築する。

(3) 文化形成と多文化性の構築に不可欠な、個体超越的な諸要素(他者、他性、共同体、イデオロギー、また、文化間の越境と混成など)が、個体的主体の生に立脚する「生の現象学」からいかに説明されるかを明らかにする。

(4) それまでの研究成果に基づいて、多文化共生を生きるための「共生の倫理学」の基礎構築を行う。

しかし、研究遂行の途上で、研究そのものを単なる「哲学的理想論」に終始させないためには、現代のような多文化社会に至る歴史的経緯や、文化を担う共同体の歴史的変遷、さらには、そうした歴史の背後に潜む思想の変遷などについての人文社会学の成果を精査することが不可欠であることに気づいた。

また、哲学的考察に関しても、とりわけミシェル・アンリの『マルクス』という著作を出発点としつつ、マルクスが、ヘーゲルの国家観の批判を通していかなる共同体論を構想しており、また、そのマルクスの思想を踏まえて、アンリがいかなる共同体論を描いているかを探究することの重要性に気づいた。

以上のことから、本研究は、研究期間の途中から、以下のような研究方法を新たに採用することにした。

(5) 原始社会から近代に至るまでの共同体(文化の母胎としての共同体)の変遷を、経済史、社会学、歴史学などの研究にもとづいて精査する。

(6) 近代以後のナショナリズムがもっていた思想的意味を、政治学や歴史学の考察をもとに解明する。

(7) ヘーゲルの国家論、および、マルクスによるその批判、そして、ミシェル・アンリによるマルクス解釈の研究を通して、アンリやマルクスが構想した共同体のあり方を解明する。

(8) ミシェル・アンリや木村敏の思想における個人の生の理解から、個人と共同性の関係性を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 研究成果の概要

多文化性や多文化共生についての現象学的考察を可能にするためには、まず、現代の多文化社会がどのような性質を持ったものであるかを正確に把握する必要がある。

現代の多文化社会という問題は、基本的に、二度の世界大戦によって「国民国家」を基調とするそれまでの世界の秩序が崩壊し、グローバル化がすすむ中で、人々が、伝統的・不変的なものとして理解された「国民」概念に強い愛着を持ち続けていることに起因すると言える。

したがって、多文化社会の性質を理解するためには、近代以降、グローバル化に至るまでの国家の変遷を知ることが必要であり、さ

らには、その近代国家に至るまでの前近代の共同体の変遷を知ることが必要となる。

こうした観点から、本研究は、まず、原始共同体から近代に至るまでの共同体の変遷、および、この共同体の変遷と密接に関連する人々の時間意識の変遷を探究し、さらに、近代以後の「国民国家」の形成と発展をうながしたナショナリズムの思想について考察して、そうした研究に基づいて、「共生の倫理学」の基礎構築をめざすことにした。

「共生の倫理学」の基礎構築は、哲学的な共同体論、および、多文化性の現象学に基づくことになるが、その際、考察されるべきは、ヘーゲルの国家論、その批判としてのマルクスの共同体論、そして、マルクス解釈に立ったミシェル・アンリの共同体論、さらには、それとの関連で木村敏の集団論などである。

しかし、本研究期間の間には、ヘーゲルの国家論、およびマルクスの共同体論までは深く考察することができなかった。よって、ここでは、哲学的観点としては、ミシェル・アンリの共同体論、および木村敏の集団論、さらには、野間俊一の現象学的精神病理学におけるハイマート概念に関する研究の成果について説明したい。

(2) 前近代における共同体と時間意識

原始社会から封建社会までの共同体

大塚久雄は、『共同体の基礎理論』において、原始社会から封建社会までの共同体の変遷を、人々が、それを包み込んでいた共同体から徐々に切り離されていくプロセスとして捉えている。原始における人々の生活は、土地、自然、共同体に密着していたが、生産要具の生産と分業の発達とともに、土地の私的占取が徐々に拡大し、それともなって、人々が、土地、自然、共同体への依存度を低減させていくと考えられている。しかし、近代以降の社会に比べれば、前近代は、基本的に、人々が土地、自然、共同体に強く結びつけられていた時代であり、その意味で大塚はこの時代の共同体を、マルクスの言葉を使って、「つつむ(vereinen)共同体」と呼ぶのである。

前近代の時間意識

真木悠介は、『時間の比較社会学』において、無限で計測可能な直線としてイメージされる近代の時間観念に先立つ時間観念について考察している。真木は、そこに原始的な時間観念と、そこから派生したヘレニズム的時間観念、およびヘブライズム的時間観念を見いだすが、ここで注目したのは、原始的な時間観念である。

真木はこの原始的な時間観念に二つの性質を見いだす。それは「共時としての通時性」という性質と「共同時間性」という性質である。前者は、現在を起源の反復として理解する時間観念、つまり、現在を起源としての過去と共時的であるものとし、起源は決して過ぎ去ることがないと考える時間観念である。それに対して、後者はある限られた共同体の

中でのみ通用する時間観念である。これは、しばしばその共同体の主たる生業に従って設定される(例えば、牛を生業にしている共同体では、牛の世話の内容に従って時間が決められる)。原始共同体にとっては、共同時間性だけが問題だったのであり、それが他の共同体との交易を行うようになって、共同体内で分業が発達するにしたがって、異なった共同体や種々の活動の間の調整が必要になり、活動内容から切り離された抽象的な「同時性」の観念が生じてきたとされるのである。

こうした「共時としての通時性」と「共同時間性」は、原始共同体における時間観念が、起源と共同体との両方に密接に結びついてきたことを教えてくれる。それは、共同体というものが、その都度の構成員だけでなく、すでに死んだ構成員をもそのうちに含み込んでいることを考えれば容易に理解できよう。共同体は単に水平的に広がっているだけでなく、死者を通して垂直的にも広がっているであり、この水平・垂直という二つの時間を結びつけるものとして、「いま、ここ」に人々が存在している「大地」があると言える。人々は、先祖代々続いてきた大地に、共同体の構成員と共に住むことで、起源と同時に存在し、共同体との密接な結びつきのうちにあると感ずるのである。

日本における地域共同体

ここまで見てきたように、原始共同体においては、人々は土地を通して、一方では起源や自然と結びついていると同時に、他方では、共同体と結びついていると言えるが、同じことは、内山節が『共同体の基礎理論』で考察している群馬県上野村の生活についても言える。伝統的な日本の里の暮らしについて内山が紹介する事例の中には、日本の里における古来からの生活のうちにも、起源との一体化、そして、共同体との一体化のうちで生きる人々の思想が存在していることを見いだすことができるのである。

(2) 共同体論から見る近代化の意味

さて、このように、近代化以前の生活においては、人々は起源、自然、共同体との密接な関係のうちにあり、それらに包まれて存在することが個人の存在様式でもあったのだが、それに対して、近代とは、こうした個人が、彼らを包むものから独立し、自立していく時代であると言える。つまり、分業の発達や他の地域との交易の発達によって、個々の集団を隔てる障壁が低くなり、諸々の文化や習慣が平均化・均一化されて、人々は土地、自然、起源、共同体などから離脱するようになるのであり、個人として自立していくことになるのである。

そして、近代になると、共同体も、前近代とは別の様相をもって現れてくることになる。つまり、土地、自然、起源、地域共同体から切り離されて孤立した個人を、再統合するものとして、とりわけ、「国家」のうちに

再統合するものとして働くようになるのである。大塚はこうした共同体を、やはりマルクスの言葉を使って、「つなぐ(vereinigen)共同体」と呼んでいる。そして、この「つなぐ共同体」の実態やそこに潜む思想を明らかにしようとする諸理論がナショナリズム論であると考えられるのである。

(3) ナショナリズムと近代国家の本質

ナショナリズム論の研究としては、ゲルナーの *Nations and nationalism* (『民族とナショナリズム』)、アンダーソンの *Imagined communities* (『想像の共同体』)、ホブズボウムの *Nations and Nationalism since 1780* (『ナショナリズムの歴史と現在』)、スミスの *National Identity* (『ナショナリズムの生命力』)などを主な研究対象とした。近代は、とりわけ、ナショナリズムの運動が活発化し、その結果として「国民国家(nation-state)」を生み出すに至ったが、上記の著者たちの主張は、この「国民国家」というものが、決して、伝統的に存在していた民族や文化に基づいて形成されたのではなく、ある意味では、国民・民族(nation)というものを捏造することによって形成され、しかも、このように「国民国家」が形成されることによって、それまで決して純粋な形で存在していたわけではなかった民族、伝統、文化などが、あたかも、過去から継続して、純粋なものとして存続していたかのようにイメージさせられた、ということである。

ゲルナーやアンダーソンの研究を通して、私たちは、先の真木の議論のうちに見いだされた事態を再確認することになった。ゲルナーは、近代の共同体を、分業の発展によって、全体的に均一化され、平均化された社会として理解しているし、アンダーソンは、国家を形成するために、国境の範囲内の人々が「同じ時間」に生きているという意識がいかに重要かを論じていた。つまり、そこには、真木が近代化の意識的要因として理解していた、「共同時間性」を、共同体の外へ普遍化し、他の共同体と共通の抽象的な時間観念を構築するという契機が見いだせるのである。

また、ホブズボウムやスミスの議論からは、大塚のように、前近代と近代とを峻別する思想を相対視する観点を獲得することができた。ホブズボウムは、前近代と近代の差異を決定的としつつも、しかし、前近代のうちにプロトナショナリズムを見いだしているし、また、スミスは、さらに積極的に、前近代のうちにエトニと呼ぶ共同体の形態を認め、それが近代以降の国民国家の「ひな形」としての役目を果たしたことを論じている。

私たちは、こうした研究を通して、近代以降の「国家」という共同体がいかなる思想から生み出されてきたのか、また、前近代から近代に至るまでの、人間の共同性の意識の変遷がいかなるものであるかを確認することができたのである。

(4) 共同的生に関する哲学的考察

本研究は、以上のように、社会科学の諸成果に基づきつつ、人類の共同性の形態やその意識の変遷を追求する一方で、哲学的に、とりわけ「生の現象学」の観点から、共同性が個人の生においていかに生きられているかを探究してきた。

ミシェル・アンリ

本研究は、「文化の誕生 アンリの生の現象学の視点から」(雑誌論文、)において、アンリの「生の現象学」が、「自然の現象学」に対する「文化の現象学」として位置づけられることを論証すると同時に、アンリにおいて、内在的な生と文化という現象がいかなる関係にあるかを考察した。アンリは、内在的で、情感的な生の運動が、その目的論にしたがって、文化的世界を生み出すと理解するが、そうした文化の誕生は、生が自己自身として自らを出生させる運動と一つであり、その意味で、アンリにおいては、生の自己実現がそのまま文化として理解されていることを論じたのである。

また、「個体と文化 アンリの生の現象学の視点から」(雑誌論文、)では、個体の生を中心におくアンリの生の現象学から、文化にとって本質的な「制度化」や「共同性」をいかに説明できるか、また、多文化社会という現代的状況に対して、アンリの生の現象学がどのような観点を提示しうるかを論じた。アンリにとっては、制度や共同体は決して個体の生にとって外的なものとしては理解されておらず、むしろ、生の目的論や生の系譜学のうちに含み込まれているのであり、現代の多文化的状況についても、こうした視点からのアプローチが可能であることを示した。

さらに、アンリの思想は一般に、個人の生を、個々人の生を超えた生そのものとの結びつきのうちで理解するが、この個人の生と生そのものとの関係は、真木が論じていた起源と現在の関係、原系列と個人の関係と類比的に理解することができる。また、アンリは、個人の誰でもが、この原系列としての生そのものとの関わりのうちにあることを共同体の本質として理解しており、その意味で、アンリの思想は、大塚や真木が原始社会における個人を、原系列や共同体との一体性のうちにあるものとして理解した発想を共有していると言える。

アンリが、生の現象学を通して理解していた個人や共同性のあり方は、個人と共同性についての前近代的な思想に通じるものだと考えられよう。

木村敏

ミシェル・アンリと同型の発想は、木村敏の臨床哲学のうちにも見いだすことができる。木村は、統合失調症などの精神病の病因を自己性の成立不全に見るが、木村にとって、個々の個人の自己性とは、根源的な自発性としての生そのものの自己実現にほかならず、個人の自己性の成立は、言わば原系列と

しての 生そのもの との結びつきで理解されているのである。

また、木村は、どの個人もみな、同じ 生そのもの を起源として共有する点に、個人のうちに宿る根源的な集団性を見だし、そこから人間の共同性をも理解しようとするのである。

こうした木村の発想は、アンリに通じるだけでなく、やはり前近代における個人と共同性に関する思想に通じると言える。アンリと木村は、共通して、近代的な時間意識によって変質させられた共同性意識を、その前近代的、原始的起源へと遡り、そこから、人間の共同性の本質を再度とり出そうとしていると言えよう。(雑誌論文 参照)

野間俊一

野間俊一は、『身体の哲学』のなかで、拒食/過食や解離症をハイマート概念との関わりで理解している。ハイマートとは、「故郷、郷里、故国、居住地」などという意味のドイツ語だが、これが精神病理学で用いられるときは、そうした具体的な事象というよりも、「自らの起源」「最も安心できる(抽象的な)場所」「自然他者との情緒的交流」を意味するものとして理解される。

野間は、拒食/過食の病因を、家族や周りの人から自己の存在を認めてもらうこと、自己の存在を全面的に肯定してもらうこと、そして、自分はここにいていいと思えること、そうしたことへの希求として理解している。それは、他者、家族、共同体との「自然な情緒的交流」のうちに自己の存在の肯定を見いだすことを意味している。この他者、家族、共同体との「自然な情緒的交流」がハイマートにほかならないが、それは、次の解離症におけるハイマート概念との対比で、「水平的ハイマート」と呼ぶことができる。

また、野間は、解離症の特性のうちに、親、日常、起源の拒否を認めている。つまり、それは自己の存在を通時的に根拠づけているものへの拒否を意味している。これは起源としてのハイマート、つまり、「垂直的ハイマート」の拒否だと言えよう。しかし、「垂直的ハイマート」はただ単に拒否されているのではない。野間によれば、それは本来、希求されているものなのだが、同時に、もっとも親密なものとして秘匿されるべきものでもあり、この秘匿されるべき「垂直的ハイマート」が顕在的に現れてくることに対して、患者は拒否の反応を示すのである。

こうした野間の考察のうちにも、個人の存在が、起源との結びつきとしての垂直的ハイマートと、他者、家族、共同体との結びつきとしての水平的ハイマートとの密接な結びつきのうちにあることが理解できるであろう。こうした野間の研究は、起源や共同体との結びつきのうちに、個人に本質的に宿る共同性を見いだしたアンリや木村の議論と通じるものだと考えられよう。

(5) 本研究の評価

以上のように本研究は、歴史学、社会学、政治学などの成果を十分に配慮した上で、それを哲学的、現象学的な議論に結びつけ、そこから多文化共生の現象学、そして、「共生の倫理学」の構築をめざしたものである。このように、人文社会学の成果と現象学の成果を密接に結びつけて論じる議論は、従来、検討されてこなかった視点であり、その意味でも、本研究は現象学の分野に新たな視点を提供するものだと言える。

残念ながら、本研究は、研究の見通しは立っているものの、未だ考察が研究領域の全体をカバーしていないために、その多くの部分が、主に大学での授業において公開されただれにとどまっており、論文等による社会的公表については不十分だと言わざるをえない。しかし、今後もこの研究は継続されるものであり、今回の研究で得られた成果も、今後の研究に組み入れる形で、順次公表していくつもりである。

(6) 今後の課題

本研究課題の重要なポイントをなすヘーゲルの国家論、および、マルクスの共同体論については、今回の研究期間内で十分に検討することができなかった。よって、今後の研究課題としては、第一に、ヘーゲルの国家論、およびマルクスの共同体論の検討を挙げることができる。

また、文化や共同性に関する人文社会学の成果として、レヴィ=ストロースなど文化人類学の詳細な検討が必要だと考えており、これも今後の課題となる。

さらに、こうした研究を基盤として、そのうに構築される予定の「共生の倫理学」については、未だ、明確な見通しをうるには至っていない。これについては、今後のさらなる研究の積み重ねによって、早期に、その見通しを立てたいと考えている。

主な参考文献

大塚久雄、『共同体の基礎理論』、岩波現代文庫、2000年。

真木悠介、『時間の比較社会学』、岩波現代文庫、2003年。

内山節、『共同体の基礎理論』、農文協、2010年。

Ernest Gellner, *Nations and nationalism*, Cornell University Press, 2008. (アーネスト・ゲルナー、『民族とナショナリズム』、岩波書店、2014年。)

Benedict Anderson, *Imagined communities : Reflections on the origin and spread of Nationalism*, Revised edition, Verso, 2000. (ベネディクト・アンダーソン、『増補想像の共同体 ナショナリズムの起源の流行』、NTT出版、2006年。)

Eric John Ernest Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780 : Programme, Myth, Reality*, Cambridge University Press, 2nd ed., 2012. (E. J. ホブズボウム、『ナショナ

リズムの歴史と現在』、大月書店、2010年。)

Anthony D. Smith, *National Identity*, University of Nevada Press, 1993. (アントニー・D・スミス、『ナショナリズムの生命力』、晶文社、2014年)

ミシェル・アンリ(Michel Henry)の諸著作。『木村敏著作集』1～8巻、弘文堂、2001年。その他の木村敏の諸著作。

野間俊一、『身体の哲学 精神医学からのアプローチ』、講談社選書メチエ、2006年。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

川瀬雅也、『自己と共同体のあいだ』、『現代思想』11月臨時増刊号、2016 Vol.44-20、青土社、査読無、2016、pp.208-225。

川瀬雅也、『個体と文化 アンリの生の現象学の視点から』、『ミシェル・アンリ研究』第5号、査読有、2015、pp.49-67。

Masaya KAWASE, «La naissance de la culture d'après la phénoménologie de la vie de Michel Henry», *Revue Internationale Michel Henry*, No. 6, 査読無、2015. pp.65-84.

川瀬雅也、『文化の誕生 アンリの生の現象学の視点から』、『ミシェル・アンリ研究』第4号、査読有、2014、pp.119-140。

[学会発表](計 6 件)

Masaya KAWASE, «La phénoménologie de la vie et l'ombre de la mort : Michel Henry et Bin Kimura», 日本ミシェル・アンリ哲学会・立命館文化現象学研究センター共催 特別シンポジウム "Ouvrir l'horizon de la philosophie de Michel Henry", 2016年12月17日、立命館大学(京都府・京都市)。

Masaya KAWASE, «La phénoménologie du «beau» selon Michel Henry et Bin Kimura», Association des Sociétés de Philosophie de Langue Française, IIIIème Congrès, 23/8/2016, L'Université « Al. I. Cuza », Iași (Romania).

川瀬雅也、『個体と文化 アンリの生の現象学における制度化と共同体』、日本哲学会 第73回研究大会、2014年6月28日、北海道大学(北海道・札幌市)。

川瀬雅也、『存在と言葉 ハイデガーとアンリ』、日本ミシェル・アンリ哲学会 第6回研究大会、2014年6月15日、成城大学(東京都)。

Masaya KAWASE, «La naissance de la culture d'après la phénoménologie de la vie chez Henry», Journées d'étude Fonds Michel Henry : Genèse et structure de *L'Essence de*

la manifestation, 4/11/2014, Université Catholique de Louvain, Louvain-la-Neuve (Belgium).

Masaya KAWASE, «La naissance de la culture d'après la phénoménologie de la vie chez Henry», 日本ミシェル・アンリ哲学会 特別シンポジウム "Michel Henry et la phénoménologie française", 2013年9月28日、関西学院大学(兵庫県・西宮市)。

[図書](計 2 件)

川瀬雅也 他、ミネルヴァ書房、『21世紀の哲学をひらく 現代思想の最前線への招待』、2016、pp.42-61。

川瀬雅也 他、法政大学出版局、『続・ハイデガー読本』、2016、pp.281-283。

6. 研究組織

(1)研究代表者

川瀬 雅也 (KAWASE, Masaya)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：30390537